

認知症疾患医療講演会

日時:平成28年11月12日(土)14:00～16:00

場所:北見赤十字病院 多目的ホール「ミント」

【講演】14:00～15:15

『認知症の人の声に耳を傾けて』

～地域の特徴を活かした支えあいの街づくり』

認知症介護研究・研修東京センター研究部長 永田久美子氏

【グループディスカッション】15:20～15:50

【まとめ】15:50～16:00



永田先生より認知症の当事者家族に対する支援の在り方や、オレンジプランを中心に国の施策方針を分かり易くご講演いただきました。

当日は認知症ケアに携わる関係者 65 名の参加がありました。

認知症の方へのケアは、今までは本人のよりよい在り方に向けて、現場職員が試行錯誤した実践から生まれた成果を、国が施策に取り入れ全国的に広げる図式でした。いよいよ団塊の世代以降の人達が認知症になる時代を迎えています。認知症になったの生き方が大きく変化し、本人がよりよく生きる支援へとシフトしています。認知症の診断を受けた当事者から、「希望と尊厳をもって暮らし続ける社会をつくるために認知症の自分達が社会をよりよく変える活動

を始めていこう」「声を出せない本人の代弁もしていこう」との声が上がり、2016年、日本認知症ワーキンググループが設立され、当事者による活発な活動が展開されています。

また、認知症の方には初期の関わりが重要です。地域の「理解・支援・つながり」を増やす事により、認知症の発症や状態悪化を遅らせることが可能であり、発症後であっても本人がよりよい状態になれる事がわかってきています。人生の最後をどう終えるかは、本人にも家族にも重要な事です。

当事者がよりよい生活を地域で継続するためには、医療・介護関係者だけが抱え込む支援ではなく、医療福祉関係者と市民が連携し、立場や職種を超えた支援へシフトしていく必要があります。

認知症はあっても地域の役割を担うことで、地域の大事な支え手になり得ます。ボランティア・有償ボランティア（例：草取り、防犯パトロール隊・保育園の助っ人等）として認知症をもつ方が潜在能力を発揮しながらいきいきと活動している地域もあります。

新オレンジプランには、認知症の本人の視点を重視し、本人の意思を尊重するとの内容と当事者・専門職・地域住民が連携して生活支援（国をあげて、省庁横断的に）が盛り込まれており、行政がこのように提示している事が非常に大きな転換点と言えます。認知症の方に向き合い、認知症の方の声に耳を傾ける支援が広がってきています。

認知症当事者の言葉の紹介があり、当事者が日々どう感じて、何を望んでいるのか、よりよい生活を少しでも長く続けるための支援についてもお話し頂きました。

講演を受け、その後のグループディスカッションでは、明日から実践できそうな事、職場で工夫してうまくいった支援等、ポジティブなディスカッションが展開されました。

最後に、「政策の充実を待つのではなく、一つでもこの地域で認知症当事者がいきいきと暮らせるためのアクションを起こしましょう。」と、永田先生から参加者へ力強いメッセージを頂きました。今回の講演会が、この地域に根ざした認知症支援者のモチベーションを高める良い機会になったものと思います。今後も現場の実践に役立つ研修を企画していきたいと考えております。

（事務局 伊藤 記）